

---

 雑 報
 

---

**M 58=NGC 4579 に超新星 (SN 1988A) 出現**

静岡県舞阪市の池谷薫氏は、1988年1月18日19時10分(世界時)に、25cm反射望遠鏡に330倍を使用し、M 58 銀河の中心より40秒角南に光度13.5等級の超新星状天体を発見し、20日18時10分(世界時)に再び観測・確認の上、東京天文台へ連絡して来られた。東京天文台では関係各観測所に確認依頼をすると同時に、国内が悪天候のこともあり IAU 天文電報中央局へ通知した。

折り返し届いた IAU からの天文電報、及び IAU 4533, 4534 によると、1988 A と符号が付けられ、池谷氏を最初の発見者とし、オーストラリアのエバンスが1月22.73日に14.5等級とし、また CERGA 天文台のボラスは1月22.19日に撮影した写真乾板上で眼視光度15.5等級としてそれぞれ独立に発見している。

アメリカのマクドナルド天文台のコ克蘭たちの1月22日の分光観測や、リック天文台での CCD 分光観測によると、H $\alpha$  の輝線が見えていることから II 型の超新星であろう、と報告している。

日本人による超新星の発見は1983年の岡崎清美氏による NGC 4753 を最初に、岡崎氏2個、堀口進午氏2個、池谷氏2個(内1個は IAU では未確認)である。

尚、堀口進午氏は今回の M 58 の超新星を、1月16日と23日に撮影した写真原板上で独立に発見されたが、東京天文台へ通報されたのが1月25日で、すでに IAU などにより公知されているので残念ながら独立発見にはならなかった。(香西洋樹)

---

 書 評
 

---

**立体で見る「星の本」** 杉浦康平, 北村正利著

(福音館書店, 定価2,000円, 昭和61年6月30日発行)

遠い星の世界が手で触れるほど間近に見える不思議な本である。ただ眺める限りでは、大小様々な青や赤の点が対になって星座の形に並んでいるだけである。だが、付録になっている青と赤のセロファンを用いた「立体メガネ」を通して眺めると、目が慣れるに従って青と赤の対が一致して、星の配置が驚くほど立体的に見えてくる。

本書は、5等星までの全天の星と球状星団、銀河系外星雲の約2,600個を取り上げ、6段階の距離で立体化したもので、構成は次の通りである。まず、全天星座がどこに書いてあるのかを示す目次があり、その次に、赤緯の高い星野から順番に21場面の星の配置図がある。終わりには、北天及び南天の星座のまとめと共に、星の配置図に使われている記号の説明等がごく簡単に示されている。さらに付録として、6ページ相当のこの本のバックグラウンド——星の距離の測り方とか立体視とは何かとか——の解説と、「立体メガネ」がついている(「立体メガネ」が壊れた時の代わりのメガネの自作のし方まで

懇切丁寧に書いてある.)。本書の特徴の一つとしては、本の見開き2ページ分を使って、左右両ページに同一星野を載せていることが挙げられる。右ページには星だけを載せ、左ページには星及び名称、赤経赤緯線、星座のイラスト等が書き加えられている。左右が同一星野になっているため、右のページで見ることのできる立体像の各点がいったい何座の何星なのかをすぐに左ページで対応させることができ便利である。また、左のページの星座のイラストも美しい。

今日の天文学では、天体までの距離は極めて重要な基本的値である。例えば、我々の銀河系の構造を知るためにも、また天体の真の大きさや質量、そして活動性を知るためにも、距離の情報は不可欠である。その意味で、これまで地球上の位置のみが示されてきた星図に対して、さらに距離の情報をも盛り込むことができれば、使用者は各天体に関するより一層の情報を得ることが可能になるであろう。ただ、本の2次元の面を使って3次元の位置を正確に表現するのは難しい。最近はやりのポップアップ——飛び出す絵本方式——は、立体像を実際につくってしまう事で直観的に天体の状態を読者にアピールできるが、正確に位置までは表わせない。一方、「立体メガネ」方式——2種類の色で与えられた絵を色メガネを使って眺めることで擬似立体像を作る方式——は、旨く作ると効果的に精度良く3次元の位置の情報を読者に伝えられる。本書は、この方法により、星の配置の立体化にかなり成功している。例えば、夏の大三角形を形成するベガ、アルタイル、デネブのうち、デネブだけ遠距離に位置するのが良く分かるし、大小マゼラン雲が非常に遠方にあることも良く分かり、教育的だ。ただ、天の川の表現方法は再考の余地があると思う。

普通の星図の代わりに用いるのは見づらいので得策ではないが、見慣れた星座を作っている星々がどれ程様々な距離にあるのかを体験するには非常に有効で、しかも面白い本である。右眼と左眼で見ている色が違うので目が疲れることをいとわなければ、何時間眺めていても飽きない。今後、続編として、立体でみる「銀河系外星雲」や「惑星」といったものも出版されると面白いと考えるのは筆者だけだろうか。(亀谷 収)

## 訃 報

本会元評議員の辻光之助氏は、去る3月24日午前0時15分、御自宅で逝去されました。享年87歳。

謹んで御冥福をお祈りするとともに、会員諸氏にお知らせ致します。